

千葉県八千代市

# 作山遺跡発掘調査報告書

2003. 3

八千代市教育委員会

## 凡　例

1. 本書は、千葉県八千代市小池字作山412 1他に所在する、作山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、土地所有者豊田秀樹氏による障害者通所更生施設建設に先行して、八千代市教育委員会が平成13年度に実施した。
3. 発掘調査・本整理作業は以下のとおり実施した。

### 確認調査

期　間 平成13年9月25日～同年10月9日

面　積 244.5m<sup>2</sup>/2,323.61m<sup>2</sup>

担　当 森 竜哉

備　考 平成13年度国庫県費補助事業

### 本調査

期　間 平成14年1月18日～同年2月5日

面　積 450m<sup>2</sup>

担　当 森 竜哉

備　考 平成13年度県費補助事業

### 本整理作業

期　間 平成14年12月13日～平成15年3月31日

担　当 森 竜哉

備　考 平成14年度県費補助事業

4. 本書の図版作成は、伊藤弘一、杉山由美子、寺澤洋子、日向洋子、森竜哉が行い、編集・執筆は森が行った。

5. 現地での遺構・遺物写真及び報告書掲載の遺物写真は森が撮影した。

6. 出土した遺物・写真・図面等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。

7. 本書の遺構番号は、発掘調査時のまま使用している。

8. 遺構・遺物の縮尺は下記のとおり統一している。

〔遺構〕 土壙1/30　周溝遺構1/100　溝状遺構1/200

〔遺物〕 土器・磁器1/2　板碑1/3　錢貨1/1

9. 本書使用の地図は、下記のとおりであり、一部加筆している。

第2図 国土地理院発行 1/50,000 「佐倉」(NI-54-19-14)

第3図 八千代市発行 1/2,500 八千代都市計画基本図

10. 発掘調査から整理作業において下記の諸氏・機関にご指導、ご協力いただきました。記して感謝いたします。(敬称略)

豊田秀樹　鳴川浩司 千葉県教育庁文化財課

## 本文目次

凡例	
第1章 序説	
第1節 遺跡の位置と環境	1
第2節 調査にいたる経緯	3
第3節 遺跡の概要	3
第4節 調査の方法と経過	3
第2章 検出された遺構と遺物	
第1節 中世土壤群以前の時代	5
第2節 中世土壤群	6
第3節 遺構外出土の遺物	23
第4節 中世土壤群と出土遺物について	24
報告書抄録	25

## 挿図目次

第1図 八千代市水系図	2
第2図 周辺の遺跡分布図	3
第3図 作山遺跡位置図	4
第4図 作山遺跡トレンチ配置図	4
第5図 作山遺跡遺構配置図	5
第6図 01I 遺構実測図	6
第7図 01P.03P.04P 遺構実測図	7
第8図 04P 出土遺物	7
第9図 05P 遺構実測図	8
第10図 06P 遺構実測図	9
第11図 07P.08P 遺構実測図	10
第12図 07P 出土遺物	10
第13図 08P 出土遺物	11
第14図 09P.10P 遺構実測図	12
第15図 09P 出土遺物	12
第16図 11P.13P 遺構実測図	13
第17図 12P.15P 遺構実測図	14
第18図 15P 出土遺物	14
第19図 16P 遺構実測図	15
第20図 16P 出土遺物	15
第21図 17P 遺構実測図	16
第22図 18P 遺構実測図	17
第23図 18P 出土遺物	17
第24図 19P.20P 遺構実測図	18
第25図 20P 出土遺物	18
第26図 21P.22P 遺構実測図	19
第27図 21P 出土遺物	19
第28図 23P 遺構実測図	20
第29図 25P.26P 遺構実測図	21
第30図 27P 遺構実測図	22
第31図 27P 出土遺物	22
第32図 01M 遺構実測図	23
第33図 遺構外出土遺物	23

## 写真図版目次

図版 1 プラン確認状況、遺構全景	
図版 2 01P.03P.04P.05P.06P完掘状況	
06P 炭出土状況	
図版 3 07P.08P.09P.10P.11P完掘状況	
07P 遺物出土状況	
図版 4 12P.13P.15P.16P.18P完掘状況	
12P 炭出土状況	
図版 5 17P.19P.20P.21P.22P完掘状況	
17P 炭、骨出土状況	
図版 6 23P.25P.26P.27P完掘状況	
23P 炭出土状況	
27P 炭出土状況	
図版 7 07P.08P.09P.15P.16P.18P.20P.	
21P.27P出土錢貨	
図版 8 04P.15P.遺構外出土遺物	

# 第1章 序 説

## 第1節 遺跡の位置と環境

八千代市は千葉県北西部に位置し、市域の大半は、千葉県北部に広がる下総台地に包まれている。台地の標高は市域においてはほぼ14~30mである。

また、海拔高度からみた市域での最高点は南西部の39.1mで、最低点は北東部の1.1mで、おおまかに南西から北東に向けて高度を下げていく傾向が見られる。

水系は、八千代市中央を東西に分断して流れる新川と中央西側から新川に合流する桑納川、北部西側から合流する神崎川により大きく構成される。新川は本来神崎川と合流した後に東流し印旛沼に流れているが、水害等その他の理由により、大規模な治水工事の結果、花見川を経て東京湾に至る流路となっている。

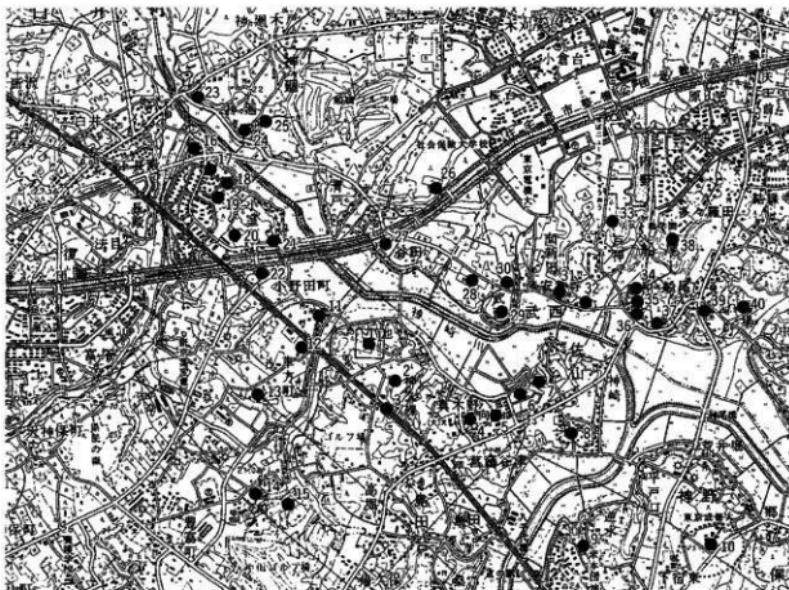
作山遺跡周辺の歴史的環境について神崎川を中心に概観してみるとする。

旧石器時代では、発掘調査に負う部分が高いが、印西市では38の船尾白幡遺跡でⅢ・Ⅳ層から細石器、ナイフ形石器が出土している。白井市では27の谷田木曾地遺跡でⅢ・Ⅳ~Ⅵ・Ⅶ層の各層位から石器が出土している。八千代市では2の妙正神遺跡で剝片、4の真木野向山遺跡の西側の松原遺跡で削器、同台地上北側の子の神台遺跡でナイフ形石器がそれぞれ発掘調査で出土している。

縄文時代では、発掘調査例、分布調査例から多くの遺跡が知られる。早・前期では陥穴、炉穴、遺物包含層を中心に遺構が検出されている。印西市の38船尾白幡遺跡で早期の燃糸文系土器群や茅山式期の炉穴2基、33の鳴神山遺跡では陥穴23基が検出された。白井市の19白井先A地点遺跡では早期の燃糸文系土器群が出土している。また、27谷田木曾地遺跡では陥穴等9基が検出された。八千代市では、10東部遺跡群中の上谷遺跡で200基程度の規模で茅山式期の炉穴が検出されているほか、真木野・佐山地区の大規模開発事業による発掘調査では、4真木野向山遺跡とその北側の低位段丘面に位置する瓜ヶ作遺跡で、早期の炉穴101基、陥穴14基、前期後半の住居跡17軒が検出された。中・後期では、印西市の38船尾白幡遺跡で五領ヶ台~下小野式が、33鳴神山遺跡では五領ヶ台、阿玉台式土器等が出土している。船橋市の20池谷津遺跡では、加曽利B~安行II式期の竪穴住居跡が3軒、27谷田木曾地遺跡では加曽利E III式期の竪穴住居跡が単独で検出されている。船橋市では、神崎川南岸にいたる鈴身川西岸を望む台地上に14鈴身丸山遺跡、15丸山遺跡等中期~後期の遺跡が所在する。八千代市では、先に掲げた真木野・佐山地区の真木野向山遺跡とその南西に位置する東山久保遺跡で中期の住居跡群、ピット群、5佐山台遺跡



第1図 八千代市水系図



第2図 周辺の遺跡分布図 (S = 1:50,000)

1 作山遺跡	2 妙正神遺跡	3 神久保寺台遺跡	4 真木野向山遺跡	5 佐山台遺跡
6 田原窪遺跡	7 佐山貝塚	8 平戸台古墳群	9 逆水遺跡	10 東部遺跡群
11 小野山城跡	12 小野山所在塚	13 半方町所在塚	14 鈴身丸山遺跡	15 丸山遺跡
16 白井先D地点遺跡	17 白井先C地点遺跡	18 白井先B地点遺跡	19 白井先A地点遺跡	20 滝谷津遺跡
21 小室八幡神社塚	22 向塚	23 神々遺跡	24 神々堀城跡	25 神々堀宮前遺跡
26 谷田遺跡	27 谷田木曾地遺跡	28 神々御塚群	29 南台塚	30 北台塚
31 上谷洋塚	32 安養寺塚	33 鳴神山遺跡	34 佐根遺跡	35 船尾町田遺跡
36 向ノ地遺跡	37 向ノ地遺跡	38 船尾白幡遺跡	39 船尾遺跡	40 船尾城跡

で中期の住居跡7軒が検出されている。また、貝塚として7佐山貝塚、10東部遺跡群北東で同じ台地上に位置する神野貝塚が所在する。佐山貝塚は、後期後半の加曾利B式期に形成された馬蹄形貝塚と考えられている。遺物は学術調査による知見から磨石からヤス・銛等多種にわたっている。神野貝塚は、中期半ば～後期後半の土器群が出土しているが詳細な時期は不明である。点列馬蹄形状の貝分布を示す。晩期については印西市鳴神山遺跡や八千代市佐山貝塚等に土器片が客体的にみられるのみである。

弥生時代では、中期後半の宮ノ台式期から後期終末まで遺跡が検出されている。中期では、八千代市の6田原窪遺跡、9逆水遺跡、10東部遺跡群中の栗谷遺跡が知られる。田原窪遺跡は、宮ノ台式期の環濠集落で環濠内部に41軒の住居跡が検出された。逆水遺跡では、四隅にブリッジをもつ方形周溝墓6基を、栗谷遺跡は、方形周溝墓群と竪穴住居跡群からなる集落跡で、宮ノ台式中ばに位置づけられる。後期では印西市の33鳴神山遺跡で後期終末～古墳時代前期の竪穴住居跡23軒、35船尾町田遺跡、36向ノ地塚遺跡、37向ノ地遺跡、38船尾白幡遺跡等から後期中ば～終末期の竪穴住居跡や遺物が検出されている。白井市では、27谷田木曾地遺跡で竪穴住居跡9軒が検出されたほか、25神々堀宮前遺跡等が知られる。八千代市では、2妙正神遺跡、3神久保寺台遺跡、9逆水遺跡、10東部遺跡群中の栗谷遺跡、上谷遺跡に

おいて後期前半～終末期の堅穴住居跡、方形周溝墓、土坑が検出されている。

古墳時代では、印西市の33鳴神山遺跡で後期の堅穴住居跡4軒、35船尾町田遺跡で前期主体の堅穴住居跡21軒と後期古墳3基が検出されている。船橋市では、16～18の白井先B.C.D地点遺跡から中期・後期の堅穴住居跡各々20軒、50軒とまとまって検出されている。八千代市では、真木野・佐山地区の5佐山台遺跡で前期後半の堅穴住居跡229軒、掘立柱建物跡14棟の大規模集落が検出された。同地区では6田原窪遺跡で前期の堅穴住居跡29軒を中心に後期についても調査されている。同地区の4真木野向山遺跡、東山久保遺跡、瓜ヶ作遺跡、松原遺跡でも各々20軒単位で検出されている。古墳では、真木野・佐山地区の真木野古墳、田原窪1.3号墳が調査の結果前期に造営されたことが判明している。また、9基で構成される8平戸台古墳群が所在する。この内2号墳が調査され、箱式石棺を埋葬施設として追葬が行われたことが判明した。年代は、出土遺物から6世紀後半～7世紀前半に属する。

奈良・平安時代では、印西市の33鳴神山遺跡で、堅穴住居跡259軒、掘立柱建物跡43棟、道路跡等が検出されている。出土遺物は灰釉陶器、奈良三彩等の高級陶器や墨書き土器等の点数が多いことから、下総国印旛郡船穂郷の中心的集落と考えられている。八千代市では、10東部遺跡群中の上谷遺跡を主体として、栗谷遺跡、向境・境堀遺跡において奈良・平安時代の堅穴住居跡群やコの字状に配置された掘立柱建物跡群を検出している。出土遺物では、多種多様な墨書き土器や温石等の特殊遺物が出土していることから塩山経営にかかる特殊集落と筆者は考える。

中近世では、土壙群、城館跡、塚等が知られる。印西市では28.29.30.31.32が塚でほぼ道路沿いに分布している。城館跡は、40船尾城跡がある。33鳴神山遺跡では、地下式壙8基、土壙1基、土坑44基が検出された。白井市では、25.26.27に塚が所在している。城館跡は、24神々城跡がある。船橋市では、12.13.21.22が塚である。城館跡は、11小野田城跡がある。八千代市では、1作山遺跡に隣接して、作山塚群が4基、2妙正神遺跡内にも神久保塚群として7基所在している。また、3神久保寺台遺跡では確認をもてないが、中世の堀跡を確認している。遺跡内から常滑産陶器片が出土している点も考慮されよう。

#### 参考文献

- 1973(財)千葉県都市公社 「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」  
1973(財)千葉県都市公社 「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」  
1976(財)千葉県文化財センター 「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」  
1984(財)千葉県文化財センター 「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅷ」  
1985(財)千葉県文化財センター 「千葉県埋蔵文化財分布地図(1)東葛飾・印旛地区」  
1987 八千代市教育委員会 「千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告集」  
1990 八千代市教育委員会 「平成6年度八千代市埋蔵文化財調査年報」  
1994 八千代市教育委員会 「千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書—平成7年度—」  
1997 八千代市教育委員会 「千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書—平成8年度—」  
1999(財)千葉県文化財センター 「印西市鳴神山遺跡・白井谷遺跡」 千葉北部地区新市街地造成整備事業実施埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—  
2000(財)千葉県文化財センター 「印西市鳴神山遺跡Ⅲ・白井谷遺跡」一千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ—  
2000 八千代市教育委員会 「千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書—平成12年度—」  
2001 八千代市教育委員会 「千葉県八千代市平戸台2号墳発掘調査報告書」  
2002 八千代市教育委員会 「千葉県八千代市特定遺跡発掘調査報告書」

#### 第2節 調査に至る経緯

平成13年7月、豊田秀樹氏から障害者通所厚生施設建設のため、該地にかかる埋蔵文化財の有無について照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会が現地踏査を実施した。照会地での表面観察は、牧舎等障害物があり困難であったが、周辺の畑地では、少ない量ではあるが奈良・平安時代の遺物等が散布している状況であった。周知の遺跡の範囲内であり、構造が検出される可能性が想定された。事業者に遺跡が所在する旨を回答し、協議した結果、確認調査を実施することになった。



第3図 作山遺跡位置図 (S=1:6,000)

### 第3節 調査の方法と経過

確認調査は障害物等の制約もあり、可能な範囲内で任意にトレンチを設定し、遺構確認に努めた。調査期間は平成13年9月25日～10月9日で、環境整備及びトレンチ設定後に遺構確認作業に移行した。その結果、ピット4基、溝1条、周溝遺構1基を確認した。10月に入り、一部遺構調査を実施して確認調査を終了した。

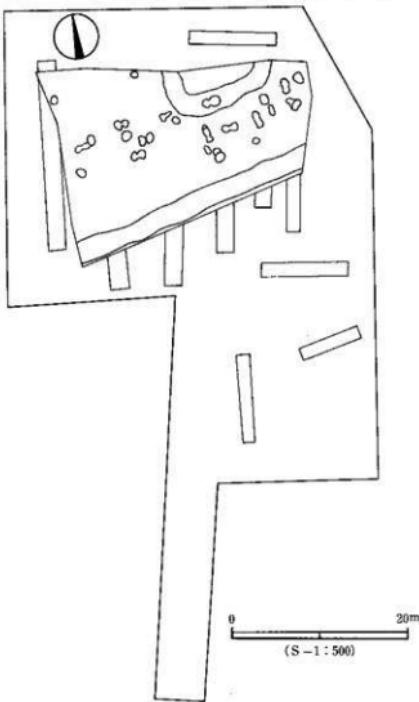
本調査は、確認調査によって得られた遺構の広がりを考慮して調査範囲を決定した。事業者に、本調査について必要な旨、連絡し協議を行った。

その結果、個人事業であり、面積が450m<sup>2</sup>ということから、千葉県から補助金を得て発掘調査を実施することとなった。準備が整った平成14年1月18日、調査に着手した。

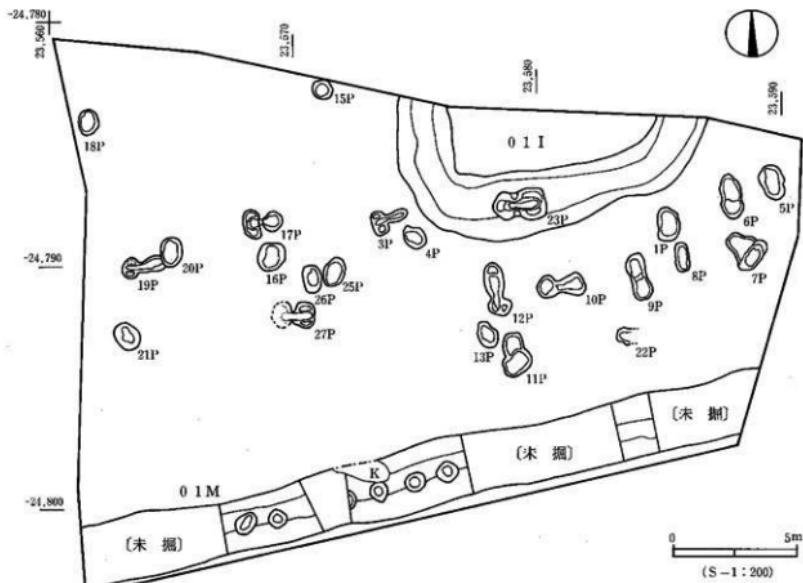
調査は公共座標系に沿って2本の東西方向の杭を設定し、遺構平面図・遺物取り上げ等をおこなった。遺物包含層は確認できなかつたので、あえて、グリッド名は付けなかつた。

調査期間は、平成14年1月18日～同年2月5日で、18～22日重機による表土剥ぎ作業、22日プラン確認作業から遺構調査に移行した。

25日05P～20P半截、28日23P半截、09P～23P遺構調査ほぼ終了、2月1日各ピット平面図、炭化材出土状況実測、2月4.5日25～27P半截、完掘等により現場作業を全て終了した。



第4図 作山遺跡トレンチ配置図



第5図 作山遺跡遺構配置図

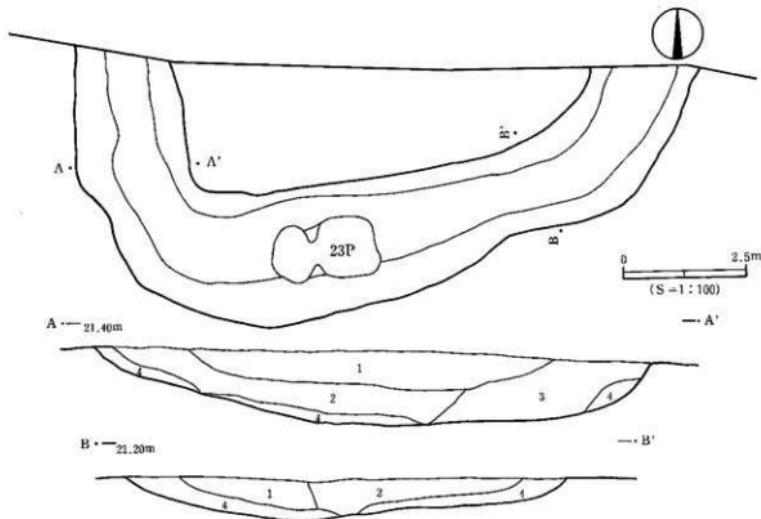
## 第2章 検出された遺構と遺物の時代

### 第1節 中世土塙群以前の時代

今回検出された遺構は、23Pと重複する01Iのみである。遺物の出土はないため、時期については判断としないが、覆土の状況や縁より具合からしても、弥生～古墳時代の遺構とは想定できない。本遺構の覆土を23Pが切っていることから、古墳時代以降中世以前の方形周溝遺構としておきたい。

#### 01I（第6図）

調査区北側のやや東に所在する。遺構の北側部分は調査範囲外である。前述したが、23Pと重複関係にあり、本遺構が切られる。N-Wに主軸方位を想定している。確認面はやや削平を受けているソフトローム面である。調査範囲外に遺構が展開しているため、平面形については不明瞭であるが、おおむね隅丸方形になると想定している。規模は一辺のみの計測値であるが、12.2mである。壁の状態は周溝外側でやや緩やかに立ち上がる。対し、内側ではやや角度をもって立ち上がっている。周溝は幅1.9～2.5m、平均的には2.1m程度である。深さは0.1～0.15mと浅いが、ソフトローム面が相当に削られているので当初の掘り込みは想定できない。覆土は、黒色土・ロームの混合層で締まっている。自然埋没の状態を示している。出土遺物はないため、時期については明確ではないが、奈良・平安時代の遺構であろうか。



01I 土層説明  
 1. 暗褐色土 ローム、褐色土混入。2mm大ローム散在。  
 2. 斑褐色土 1層細粒、褐色土の混入や多い。  
 3. 带褐色土 褐色土主にローム粒混入。3~4mm大ローム粒混入。  
 4. 褐色土 ローム主に暗褐色土混入。

第6図 01I 遺構実測図

## 第2節 中世

今回検出された遺構は、01M(01溝状遺構)1条とそれに並行した状況で立地して検出された土壤25基である。詳細は後述するが、土壤は炭化物を伴うT字状半円形のものと梢円形のものが見られ、出土遺物は人骨や齒、渡来銭貨、磁器である。銭貨には寛永通寶等の江戸時代以降の銭貨が混入していないことから、中世の遺構群であることは確実である。

### 01P(第7図・図版2)

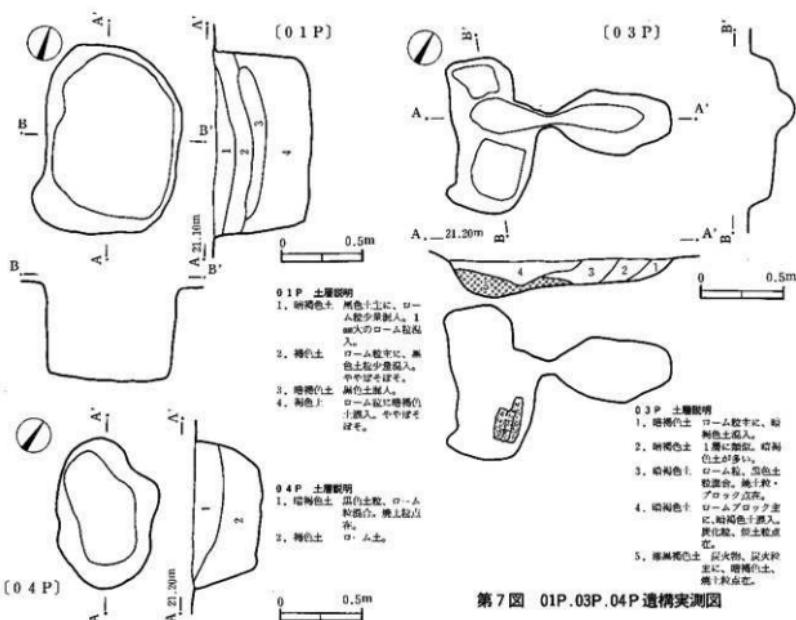
**位置・遺存状態** 調査区の東側に位置する。南0.4mに近接して08Pがある。上辺がややいびつであるがおおむね良好である。

**規模・長軸方位** ややいびつな楕丸長方形で、A-A'間1.13mB-B'間0.84m深さ0.61m N-18°-W

**壁・底面の状態** 壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。ハードローム中を底面とし、ほぼ平らである。

**覆土の状態** 土層観察においては4層のレンズ状堆積を示す。覆土は暗褐色土と褐色土の互層で、褐色土はローム土を主としてややぼそぼそしており、締まりがない。覆土は埋め戻しによる人為的堆積である。

**出土遺物** 検出されなかった。



第7図 01P.03P.04P 遺構実測図

### 03P (第7図・版図2)

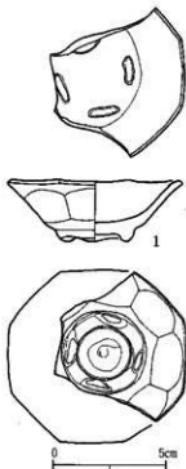
位置・遺存状態 調査区ほぼ中央に位置する。南側0.3mに近接して04Pがある。遺存状態は良好である。

規模・長軸方位 楕円形と長方形の土坑の組合せによりT字状の平面形をもつ。規模は長方形側が0.9m×0.5mで深さ0.25m、楕円形側が0.7m×0.4mで深さ0.15m、全長1.35mである。方位はS-59°-W (Aを奥として)

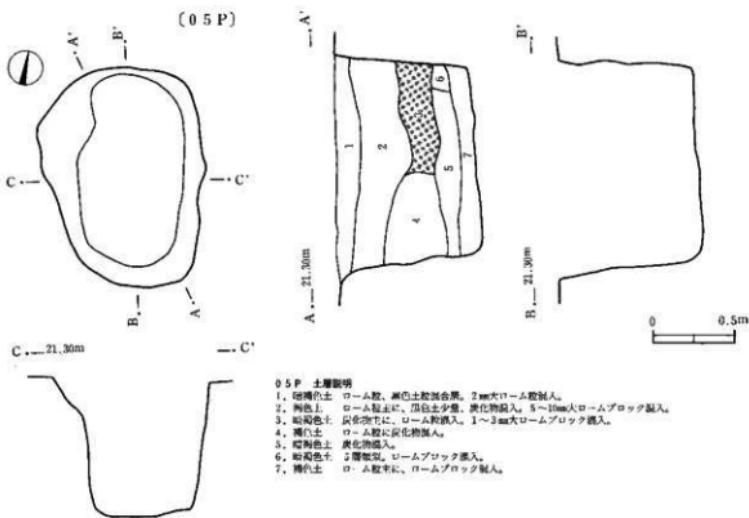
壁・底面の状態 壁面はやや緩やかに立ち上がる。底面は3か所あり、長方形側で2か所、楕円形側と長方形側を繋ぐように1か所で、楕円形から長方形側に向かって下がっている。

覆土の状態 土層観察においては5層で縦方向の人為的堆積を示している。ローム土、焼土・ロームブロックを主としてややぼそそしている。長方形側の土坑底面には炭化物、炭化物が0.12mの厚さで堆積している。

出土遺物 検出されなかった。



第8図 04P 出土遺物



第9図 05P 遺構実測図

#### 04P (第7.8図・図版2.3)

**位置・遺存状態** 調査区中央に位置する。北0.3mに近接して03Pがある。上辺がややいびつであるがおむね良好である。

**規模・長軸方位** ややいびつな長方形で、0.92m×0.6m 深さ0.4m N-44°-W

**壁・底面の状態** 壁面は角度をもって立ち上がる。ハードローム中を底面とし、ほぼ平らである。

**覆土の状態** 土層観察においては2層に分層された。暗褐色土下にローム土が充填されていて、しかも縮まっている状態だったため、掘りすぎと思われた。しかし、層中から白磁が出土した点ややにごりのあるロームだったため、掘り進んだ結果全容を検出した。

**出土遺物** 2層中から白磁の多角盃が出土した。口径7.8cm、器高2.7cmで口部は八辺で全周する。口縁端部は面取りされて、各辺に向けて緩やかな波状を描く。体部外面は亀甲状の面取りを施す。高台は底面において、ヘラ状工具により4か所の切り込みを入れて四脚状の効果をあげている。内面には、同器種の重ね焼きの痕跡が見られる。

#### 05P (第9図・図版2)

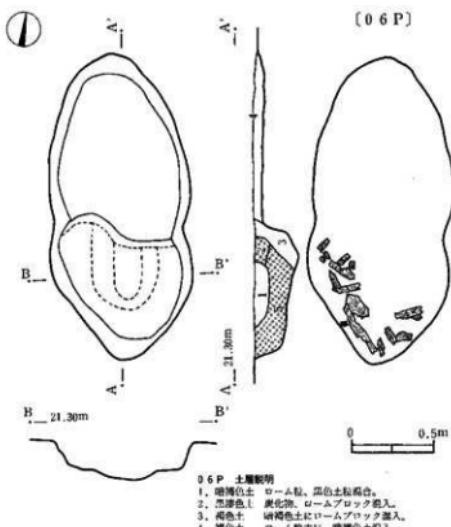
**位置・遺存状態** 調査区東端に位置する。西1.0mに06Pが並列している。おおむね良好に遺存している。

**規模・長軸方位** ややいびつな長方形で、B-B'間1.34m C-C'間0.92m 深さ0.86m N-46°-W

**壁・底面の状態** 壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。ハードローム中を底面とし、ほぼ平らである。

**覆土の状態** 土層観察においては2層以下炭化物やロームブロックを混入しており、明らかな埋め戻しを行っている。

**出土遺物** 検出されなかった。



第10図 06P 遺構実測図

### 06P (第10図・図版2)

位置・遺存状態

調査区東端に位置する。東1.0mに06Pが並列する。良好に遺存する。

規模・長軸方位

くびれのある楕円形で、  
A-A'間1.86m B-B'間0.84m  
深さはA'側0.06m A側0.28m  
S-18°-E (Aを奥として)

壁・底面の状態

壁面はやや角度をもって立ち上がっている。底面はくびれ北側では浅く、南側で深い。また、南側では段をもっている。

覆土の状態

ロームとロームブロックを主体として、南側では炭化物、炭化粒が検出される。

出土遺物 検出されなかった。

### 07P (第11.12図・図版3.7)

位置・遺存状態 調査区東端に位置する。北1.0mに06Pがある。おおむね良好に遺存している。

規模・長軸方位 北西側に浅い張出しを持つビットと深い楕円形のピットで組合せられる。規模はB-B'間1.46m C-C'間1.55m 深さ0.72m N-44°-E (B'を奥として)

壁・底面の状態 壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。ハードローム中を底面とし、ほぼ平らである。

覆土の状態 4.5層を当初の埋め戻し土として、他の層は一気に埋め戻している。炭化物は6層にみられるが、他所から持ってきたものと思われる。

出土遺物 1は頭蓋骨と歯、2は骨片、3は銭貨6枚である。

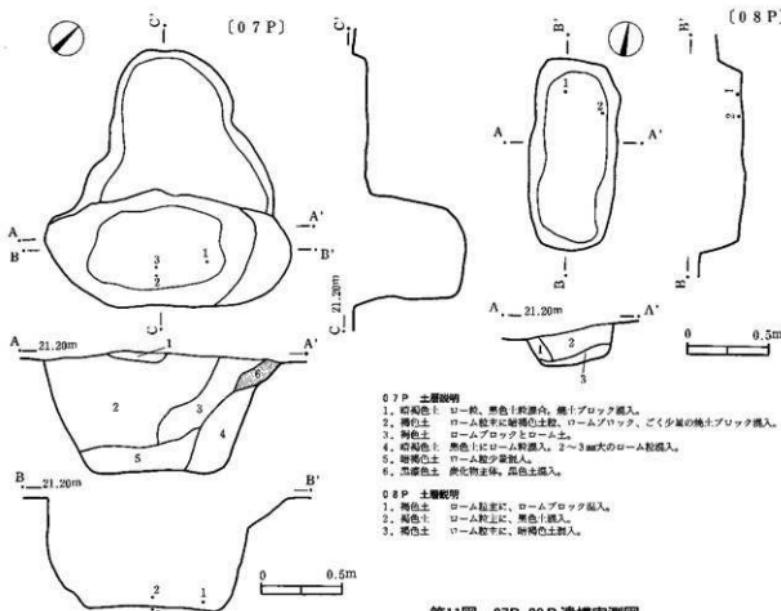
### 08P (第11.13図・図版3.7)

位置・遺存状態 調査区東側に位置する。北0.4mに01Pがある。おおむね良好に遺存している。

規模・長軸方位 ややいびつな隅丸長方形で、A-A'間0.53m B-B'間1.17m 深さ0.21m N-20°-W  
壁・底面の状態 壁面はやや角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平らである。

覆土の状態 各層ともローム土で、埋め戻しの土である。

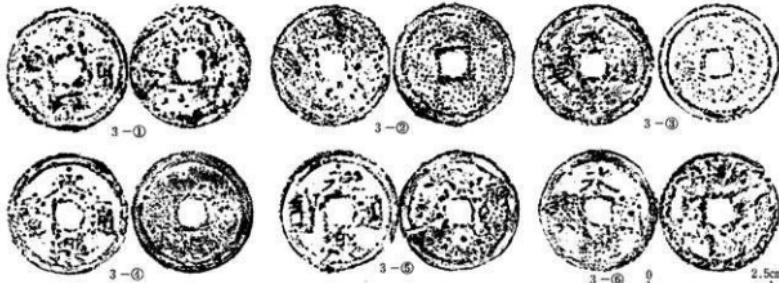
出土遺物 1は銭貨4枚、2は銭貨2枚で出土している。



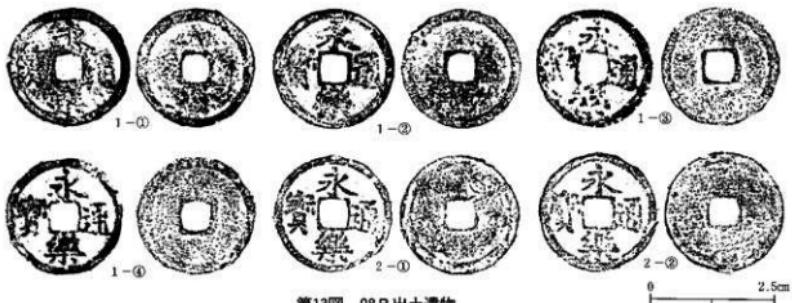
第11図 07P.08P 造構実測図

番号	種別	観察上の特徴				
		頭蓋骨・歯 頭蓋骨は頸項から中位 歯は臼歯7、小臼歯4、犬歯1、前歯1、その他破片				
07P 1	頭蓋骨・歯					
2	前腕骨か	遺存長6.1cm、直径2.3cm				

番号	銅貨名	径 (mm)	厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
07P-3①	永楽通寶	25.4	1.3	6.0	3.0	
3②	永楽通寶	25.0	1.0	5.5	3.1	
3③	永楽通寶	25.2	1.3	6.1	3.2	
3④	永楽通寶	24.9	1.2	6.3	3.1	
3⑤	永楽通寶	25.1	1.3	6.3	3.3	
3⑥	永楽通寶	25.0	1.2	6.4	2.9	



第12図 07P 出土遺物



第13図 08P 出土遺物

番号	銭貨名	径 (mm)	厚 (mm)	孔徑 (mm)	重量 (g)	備考
08P-1-①	永樂通寶	24.8	1.1	6.2	3.2	
1-②	永樂通寶	24.8	1.1	6.6	2.9	
1-③	永樂通寶	24.6	1.0	7.3	3.1	
1-④	永樂通寶	24.8	1.3	6.2	3.5	
08P-2-①	永樂通寶	24.6	1.3	6.2	3.0	
2-②	永樂通寶	24.3	1.2	7.2	3.1	

番号	種別	観察上の特徴
09P-1	前腕骨か	遺存長6cm
2	歯	臼齒3 穀骨片
4	歯	臼齒2 その他歯片

#### 09P (第14.15図・図版3.7)

位置・遺存状態 調査区東側に位置する。東1.3mに08Pがある。良好に遺存している。

規模・長軸方位 ややいびつな長方形で、A-A'間1.85m B-B'間0.74m C-C'間0.75m

深さ 上段0.38m 下段0.61m N-32°-W

壁・底面の状態 壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は2段でほぼ平らである。この2段の違いは土層断面の観察から同軸上の重複関係と考えられる。南側の浅い土壌を北側の深い土壌が切っている。土層断面から想定した北の土壌規模は、1.3m×1.04mの長方形である。

覆土の状態 各層ともローム土で、両者とも埋め戻しの土である。炭化物の混入は見られない。

出土遺物 1は骨片、2は歯、3は銭貨6枚、4は歯である。

#### 10P (第14図・図版3)

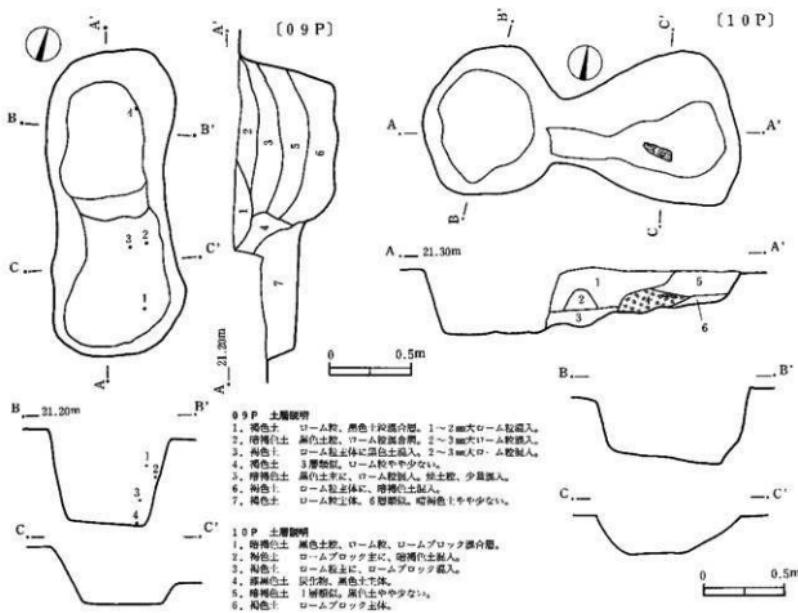
位置・遺存状態 調査区中央のやや東に位置する。西1.4mに12Pがある。西側の円形部分は、確認調査時において単独構造の02Pとして調査しているため、土層断面が通っていない。

規模・長軸方位 円形と楕円形を組み合わせた平面形で、A-A'間1.92m B-B'間0.93m C-C'間0.91m 深さ0.19~0.36m S-82°-W (炭が出土したA'側を長軸とした)

壁・底面の状態 壁面はやや角度をもって立ち上がる。底面はAからA'に従ってやや凹凸をもって緩やかに上がっている。

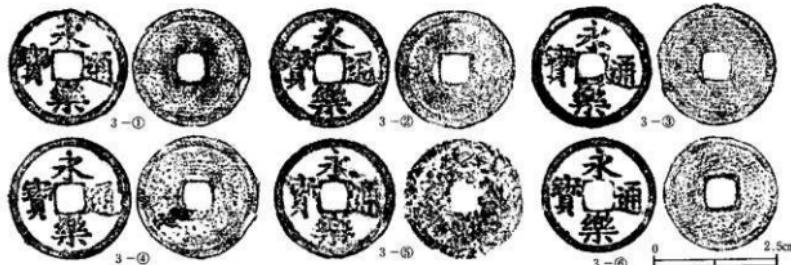
覆土の状態 確認調査時の知見によりA側の覆土中には、炭化物や骨片等の出土はなかった。土層断面の観察からは、ロームブロック混入の埋め戻し土が主体である。

出土遺物 検出されなかった。

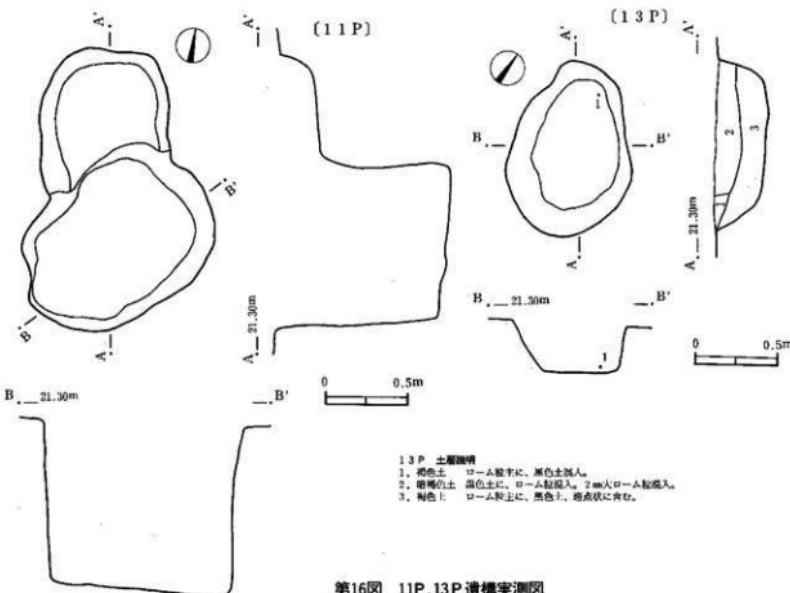


第14図 09P, 10P 遺構実測図

番号	銘 貨 名	径 (mm)	厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
09P-3①	永樂通寶	24.2	0.9	7.2	3.7	
3②	永樂通寶	24.7	1.0	7.2	3.6	
3③	永樂通寶	25.1	1.1	7.2	3.7	
3④	永樂通寶	25.1	1.1	6.8	3.4	
3⑤	永樂通寶	24.6	1.0	7.2	2.7	
3⑥	永樂通寶	23.6	0.9	6.5	1.9	



第15図 09P 出土遺物



第16図 11P, 13P遺構実測図

#### 11P (第16図・図版3)

**位置・遺存状態** 調査区中央のやや南側に位置する。北西0.2mに13Pがある。良好に遺存している。

**規模・長軸方位** 07P同様張り出しをもつタイプである。 A-A'間1.70m B-B'間1.24m

**深さ** 上段0.14m 下段0.69m N-5 3°-E (B-B'を長軸として)

**壁・底面の状態** 壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平らである。

**覆土の状態** ローム土を主体とした埋め戻しの土で、全体に締まる。炭化物の混入はなかった。

#### 12P (第17図・図版4)

**位置・遺存状態** 調査区中央に位置する。北側で緩く立ち上がるが、伴うか否かは明確ではない。

**規模・長軸方位** 円形と長方形を組み合せた平面形で、A-A'間1.95m B-B'間0.97m C-C'間1.16m  
深さ0.32m 有段部分0.2~0.32m S-0°-N (A側を長軸として)

**壁・底面の状態** 壁面はやや角度をもって立ち上がる。底面はA~A'にむけてやや上がっている。

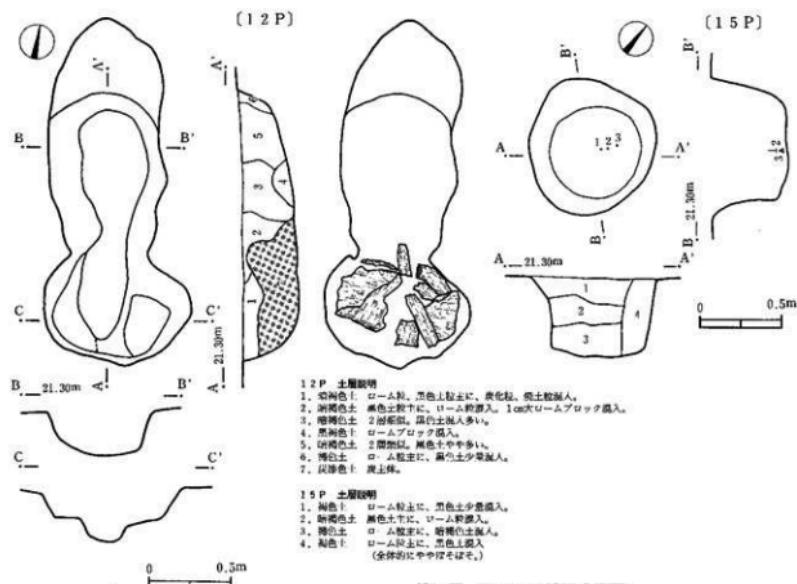
**覆土の状態** 南側部分はほぼ炭で被われている。また、炭中に骨片が含まれていた。土層断面の観察からは、ロームブロック混入の埋め戻し土が主体である。

#### 13P (第16図・図版4)

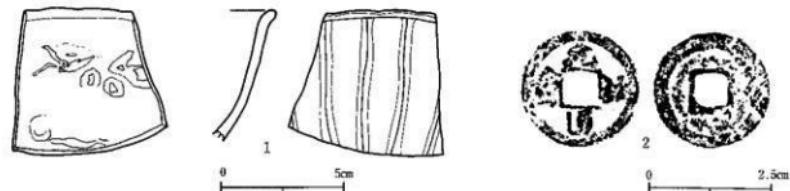
**位置・遺存状態** 調査区中央に位置する。南東0.2mに11Pがある。良好に遺存している。

**規模・長軸方位** ややいびつな梢円形で、A-A'間1.06m B-B'間0.70m深さ0.3m N-16°-W

**壁・底面の状態** 壁面はやや角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平らである。



第17図 12P・15P 造構実測図



第18図 15P 出土遺物

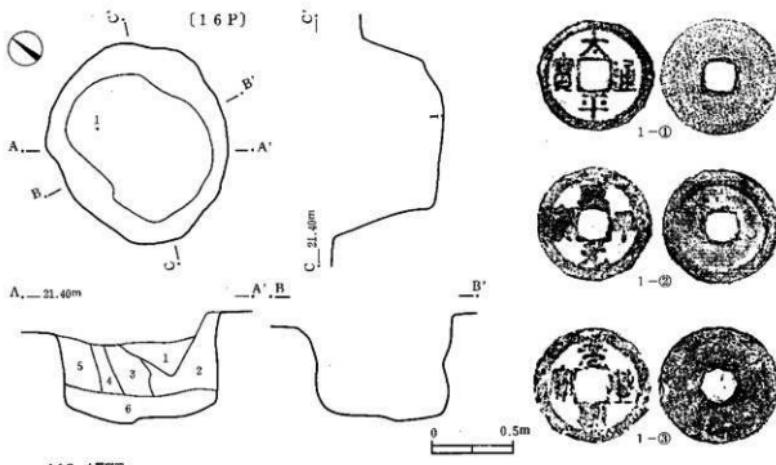
覆土の状態 各層ともローム土で、埋め戻しの土である。

出土遺物 1は齒である。

番号	種別	觀察上の特徴
13P-1	齒	人印齒9, 小臼齒5, 大臼齒3, 前歯2, 切歯3, その他破片

番号	種別	observation
15P-1	青磁碗	蓮瓣文を施すタイプで、内外面は黄緑色に発色している。外縁の蓮瓣文はへらによりわざかに描出されるが、先端は平らにそろっている。口縁部は綫やかな割目で窓井の欠點を意識しているかに見える。内面は別種の釉薬で円形や羽状、雲状の模様を描くが不明瞭である。この部分は白色に発色している。
3	齒	臼齒6, 大臼齒2, 前歯1, その他破片

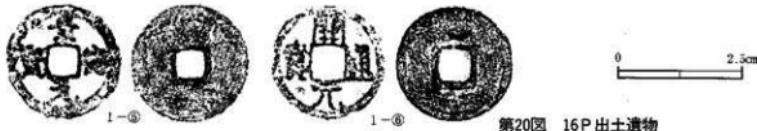
番号	銭貨名	径 (mm)	厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
15P-2	元祐通寶	24.0	1.0	8.5	2.2	



16P 土質図面

1. 硫化物土 ローム鉱、黒色土混合層。しまる。
2. 黄褐色土 ロームブロック、ローム粘土合層。ややぼそ。
3. 黄褐色土 2-3mm大粒の火成岩。石英砂岩～2mm大粒ローム鉱混入。しまる。
4. 黄褐色土 2-3mm大粒火成岩。ぼそぼそ。
5. 黄褐色土 2-3mm大粒～火成岩。1層厚約1cm。ぼそぼそ。
6. 黄褐色土 ローム土主体。しまっている。

第19図 16P 構造実測図



第20図 16P 出土遺物

番号	銭貨名	径 (mm)	厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
16P 1①	太平通寶	24.2	1.1	7.8	3.3	
1②	咸平元寶	24.3	1.0	7.5	2.9	
1③	元祐通寶	24.6	1.3	7.3	3.7	
1④	紹聖元寶	24.4	1.0	8.4	3.1	一頭欠
1⑤	崇寧元寶	24.3	1.2	7.5	3.9	
1⑥	開元通寶	24.1	1.0	7.6	2.9	背土月

15P (第17図・図版4)

位置・遺存状態 調査区北側のやや中央に位置する。良好に遺存している。

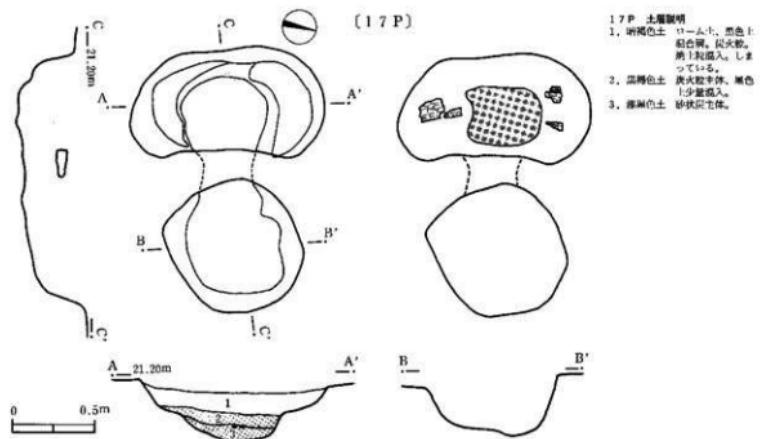
規模・長軸方位 ややいびつな円形で、A-A'間0.75m B-B'間0.82m 深さ0.5m

N-28°W (歯の位置を長軸として)

壁・底面の状態 壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平らである。

覆土の状態 ローム土を主体とした埋め戻しの土で、全体にはぼぼそ。炭化物の混入はなかった。

出土遺物 1は青磁碗、2は銭貨1枚、3は歯である。



第21図 17P 遺構実測図

#### 16P (第19.20図・図版4)

**位置・遺存状態** 調査区西側のやや中央に位置する。北0.3mに17Pが近接している。遺存状態は上面で一部カクランを受けているが、おおむね良好である。

**規模・長軸方位** ややいびつな円形で、B-B'間1.05m C-C'間1.25m深さ0.58m  
N-0°-S (1の位置を長軸として)

**壁・底面の状態** 壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凹凸があるが、ほぼ平らである。

**覆土の状態** ローム土、ロームブロックを主体とした埋め戻しの土で、部分的に縮まった層も見られるが、全体的にはぼそぼそしている。炭化物の混入はなかった。

**出土遺物** 1は銭貨6枚である。6層下部から出土している。

#### 17P (第21図・図版5)

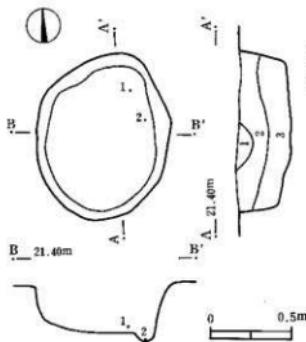
**位置・遺存状態** 調査区西側のやや中央に位置する。南0.3mに16Pが近接している。遺存状態は上面で一部カクランを受けているが、おおむね良好である。

**規模・長軸方位** 円形と梢円形のピットがトンネルを通じて連結している。全長1.62m、円形ピットの規模は、 $0.82m \times 0.86m$ で深さ0.34m、梢円形ピットは、 $1.18m \times 0.6m$ で深さ0.28mである。S-69°-W (Cを奥として)

**壁・底面の状態** 壁面はやや角度をもって立ち上がる。底面はやや凹凸があるが、ほぼ平らに円形ピットから梢円形ピットにつながっている。梢円形ピット側は底面の両側に、段状に一段高い底面をもつ。深さは0.1~0.18mである。

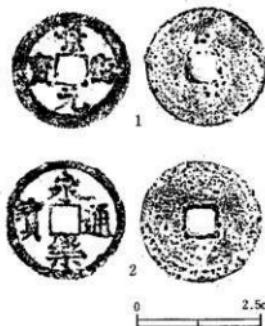
**覆土の状態** 円形ピット側は、ローム土を主体とした埋め戻しの土であった。梢円形ピット側は炭化物主体で、部分的に骨片等を含んでいる。

**出土遺物** 検出されなかった。



第22図 18P 遺構実測図

18P 土壌剖面  
1. 黒色土 ローム主に黒色少々混入。  
2. 灰白色 土の土や多い。  
3. 褐色土 ローム主に黒色ごく少々混入。



第23図 18P 出土遺物

番号	銭貨名	徑 (mm)	厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
18P-1	嘉慶元寶	24.2	1.1	6.9	2.7	
2	永樂通寶	25.2	1.3	6.7	2.9	

#### 18P (第22.23図・図版4.7)

位置・遺存状態 調査区西端の北側に位置する。良好に遺存している。

規模・長軸方位 ややいびつな円形で、1.04m×0.82m深さ0.32m N-0°-S

壁・底面の状態 壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は部分的に下がるが、ほぼ平らである。

覆土の状態 ローム土を主体とした埋め戻しの土で、全体に締まる。炭化物の混入はなかった。

出土遺物 1, 2共に銭貨各1枚で、3層下部からの出土である。

#### 19P (第24図・図版5)

位置・遺存状態 調査区西端の中央に位置する。掘り込みも浅く、遺存は悪い。20Pと重複している。

規模・長軸方位 長楕円形と長方形を組み合わせた平面形で、全長1.9m B-B'間0.9m 深さ0.14m  
有段部分0.06m S-7.2°-W (Aを奥として)

壁・底面の状態 壁面は緩やかに立ち上がる。底面は西側に向かってやや下がる。

覆土の状態 西側の長方形ピットで炭化物が全面に検出された。骨片は出土していない。重複関係では、断面観察から20Pが19Pを切っているため、19Pが古い。

出土遺物 検出されなかった。

#### 20P (第24.25図・図版5.7)

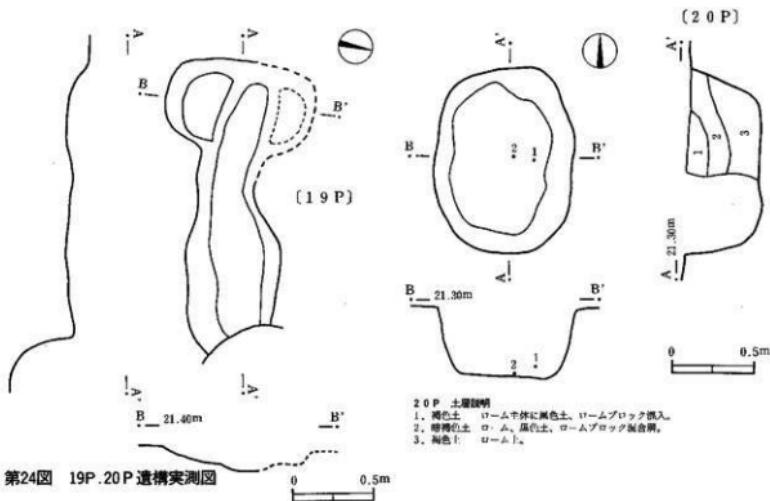
位置・遺存状態 調査区西端の中央に位置する。19Pと重複している。遺存は良好である。

規模・長軸方位 ややいびつな凹丸長方形で、A-A'間1.14m B-B'間0.86m 深さ0.45m  
N-0°-S (A'側を長軸として)

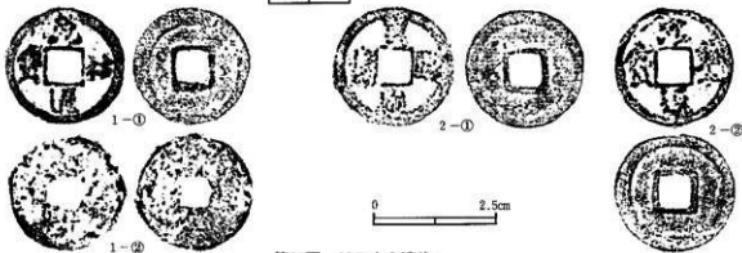
壁・底面の状態 壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。底面はほぼ平らである。

覆土の状態 ローム土を主体としてロームブロックを混入した土が埋め戻されている。焼土、炭化物等は検出されなかった。

出土遺物 1, 2共に銭貨各2枚で、3層下部からの出土である。



第24図 19P・20P 遺構実測図



第25図 20P 出土遺物

番号	銭貨名	径 (mm)	厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
20P-1 ①	元祐通寶	24.2	1.1	8.1	2.5	
1 ②	不 明	23.8	1.1	7.5	2.6	
2 ①	淳祐通寶	25.0	0.9	8.0	2.7	
2 ②	元祐通寶	24.6	1.0	8.0	2.6	

### 21P (第26.27図・図版5.7)

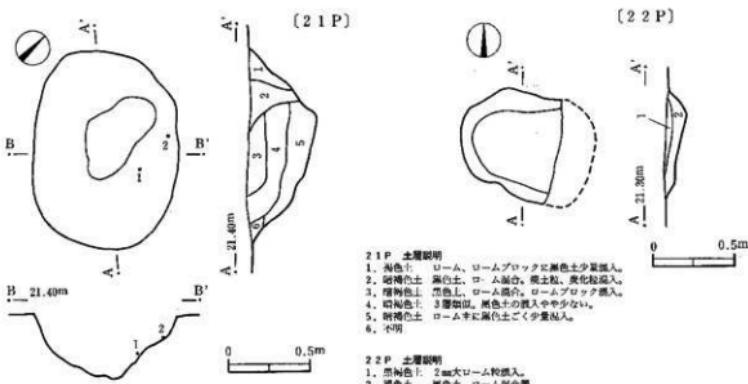
位置・遺存状態 調査区西端の中央やや南に位置する。遺存は良好である。

規模・長軸方位 ややいびつな隅丸長方形で、A-A'間1.24m B-B'間0.9m 深さ0.43m  
N-40°W (A'側を長軸として)

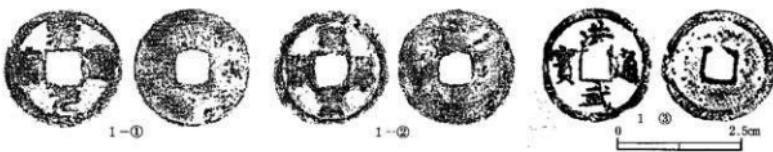
壁・底面の状態 壁から底面にかけてすり鉢状の断面を持つため、底面はないといつてもよい。

覆土の状態 ローム土、黒色土の混合層で、ロームブロックを多く含んでいる。全体に縮まりに欠ける。2層中で焼土粒と炭化粒を含んだ層が見られる。

出土遺物 1は銭貨3枚、2は骨片で両者共に壁面からの出土である。



第26図 21P.22P 造構実測図



第27図 21P 出土遺物

番号	鉱質名	径(mm)	厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
21P-1 ①	革造元寶?	24.0	0.8	8.3	2.8	
1 ②	皇宋通寶?	24.1	0.9	8.2	2.4	
1 ③	洪武通寶	23.6	1.1	7.2	2.4	

### 2.2P (第26図・図版5)

位置・遺存状態 調査区東側のやや南に位置する。1/2程度のみで遺存は悪い。

規模・長軸方位 ややいびつな円形と想定される。0.7m×0.82mで深さ0.1mである。

N-8.6°-W (長軸方位として)

壁・底面の状態 壁面は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平らである。

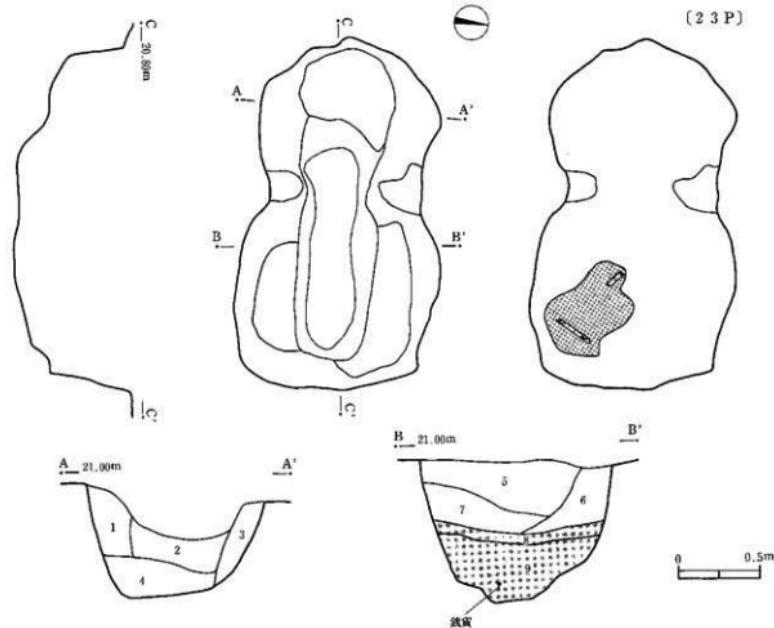
覆土の状態 黒色土、ロームを主体とする層で、炭化物、焼土粒の混入はなかった。

出土遺物 検出されなかった。

### 2.3P (第28図・図版6)

位置・遺存状態 調査区中央のやや東に位置する。01Iと重複している。遺存は良好である。当初、01Iの土層観察用ベルトをB-B'のラインで設定したため、23Pを23.24Pの2造構として調査していた経緯があった。ベルト撤去後に同一造構とした。

規模・長軸方位 ややくびれのある隅丸長方形で、全長2.18m, A-A'間1.1m, B-B'間1.22m



第28図 23P 遺構実測図

深さ0.6~0.84m N-86°-E (C'を奥とした長軸方位として)

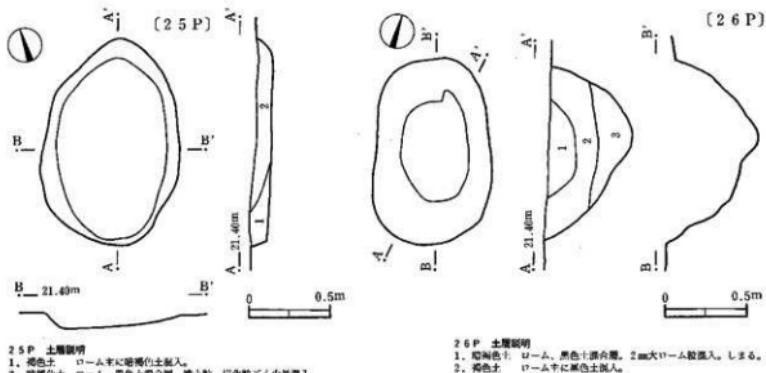
**壁・底面の状態** 壁面はやや角度をもって立ち上がる。底面は若干の凹凸は見られるが、おおむね平らである。B-B'側のピットは、深い底面の両サイドに一段高い底面をもっている。

**覆土の状態** A-A'側では、黒色土、ローム、ロームブロックの混合層による埋め戻し土で、全体にややぼそぼそして締まりに欠けていた。B-B'側では、上層ではローム土を主体とした埋め戻し土で、下層では炭化粧を主体とした砂状の炭が厚さ0.4mで堆積していた。炭は原形をとどめるものが少ないが、雑木の太い枝を主として真竹も検出している。

**出土遺物** B-B'側のピットの9層中から銭貨が出土したが、所在が不明のため図示できなかった。

#### 25P (第29図・図版6)

**位置・遺存状態** 調査区中央のやや西側に位置する。西側にほぼ接するように26Pがある。遺存状態は



第29図 25P.26P 遺構実測図

ほぼ良好である。

規模・長軸方位 楕円形で、A-A'間1.24m B-B'間0.82m 深さ0.11m N-28°-E (A'を奥として)  
壁・底面の状態 壁面は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平らである。

覆土の状態 2層において焼土粒、炭化粒がごく少量含まれる。

出土遺物 検出されなかった。

#### 26P (第29図・図版6)

位置・遺存状態 調査区中央のやや西側に位置する。東側に接するよう25Pがある。遺存状態はほぼ良好である。

規模・長軸方位 ややいびつな隅丸長方形で、1.12m×0.71mで深さ0.5mである。N-18°-W

壁・底面の状態 壁面は緩やかに立ち上がる。底面はすり鉢状で、平坦な部分は見られない。

覆土の状態 ローム土を主体とする埋め戻し土で、炭化物、焼土粒の混入はなかった。

出土遺物 検出されなかった。

#### 27P (第30.31図・図版6.7)

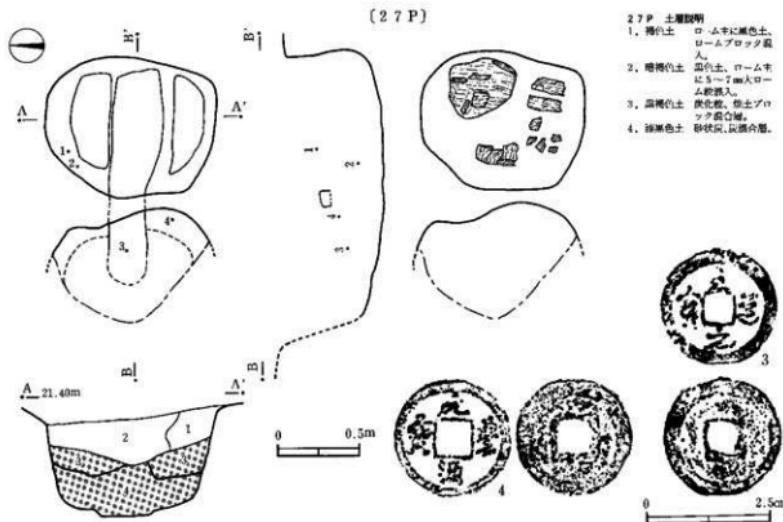
位置・遺存状態 調査区中央のやや西側に位置する。北0.3mに26Pがある。遺存状態は西側において大きくカクランを受けており、あまり良くない。

規模・長軸方位 形態としては17Pと同様、楕円形と円形のピットがトンネルを通じて連結すると想定される。遺存全長1.62m(以上)、東側ピットは楕円形で1.02m×0.84m、深さ0.58mである。西側ピットは規模不明だが、深さ0.5mである。方位は、E-0°-W(B'を奥にして)

壁・底面の状態 壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平らで、西側でやや上がっている。

覆土の状態 東側ピットでは、上層でローム土、下層で炭及び炭化粒が0.3m堆積していた。西側ピットは、ローム土を主体とした土層が見られた。

出土遺物 3.4は、錢貨で各1枚ずつ覆土中層から出土している。



第30図 27P 遺構実測図

第31図 27P 出土遺物

番号	銭貨名	径 (mm)	厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
27P 3	至道元寶	24.4	1.0	6.8	3.0	
4	元豐通寶	24.2	1.1	8.2	3.1	

### 01M (第23図・図版1)

位置・遺存状態 調査区南側に位置する。部分的にカクランが見られるが、おおむね遺存状態はいい。

規模・方位 幅2.7m、全長27.8m以上(調査区外に延びている)、深さ0.43mである。

方位はN-73°Eでおおむね東西方向に延びている。

壁・底面の状態 壁面は緩やかに立ち上がる。底面は平坦な部分がやや狭く、断面は角度の緩いV字状

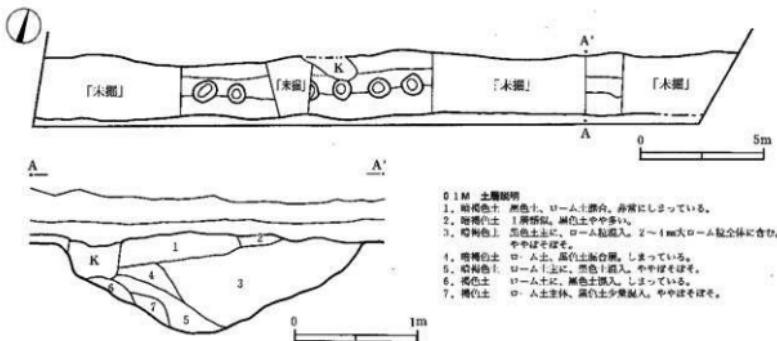
になっている。幅の狭い底面には、部分的に浅い円形のピットが見られる。ピットの規模は0.9mの円形で、深さは0.1~0.2mである。ほぼ1.4~1.5m等間で並んでいる。

覆土は暗褐色土で2~3mmの大ロームブロックを含んでいる。縮まりなくややそぼそぼしている。

覆土の状態 覆土は1.2.3層の黒色土系と4~7層のローム土系に大きく分けられる。片側からの埋め戻しと自然埋没としての可能性があると想定される。また覆土中には、顕著な硬化面は検出されず、溝の廃絶後は特に使用される場所ではなかったと想定できる。

出土遺物 検出されなかった。

その他の 当初この溝は、近世以降の時期と想定していたが、中世土壤群と並行した位置関係や重複が全く見られない事から、出土遺物を欠くくらいはあるが、土壤群を画する施設として考えたい。



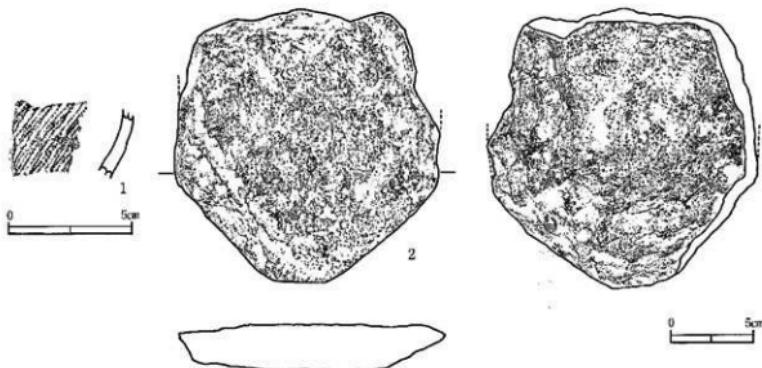
第32図 01M造構実測図

### 第3節 造構外出土の遺物

本遺跡からは、造構外出土の遺物として弥生土器1点、板碑片1点が出土している。

1の弥生土器は、確認調査時においてトレーナー内より出土したものである。壺胴部斜面方向の付加条文を施す。胎土には、長石、銀雲母の細片が混入される。焼成は良好で、外面は暗褐色、内面は茶褐色である。

2の板碑片は、表面採集で出土地点や層位等は全く不明であるが、土壤群との関わりも考慮されるものである。武藏型板碑の基底部にあたるもので、幅16.1cm、遺存長16.8cm、石材は緑泥片岩である。表面には、加工の際のノミ痕が約3cmの幅で部分的に見られる。



第33図 造構外出土遺物

## 第3章 まとめ

### 第1節 中世土壤群と出土遺物について

遺構 今回の調査において検出された遺構は、土壤25基と土壤を画する溝1条である。土壤は平面形態から観ると①T字形、②円形～楕円形、③隅丸長方形に大きく分類できる。更に小分類を試みると以下のようになる。

- ①T字形——  
—イ. 挖り込みが深く、燃焼坑が長方形を呈するタイプ17P, 23P, 27P  
—ロ. 挖り込みが浅く、燃焼坑が長方形を呈するタイプ03P  
—ハ. 挖り込みが浅く、燃焼坑が円形を呈するタイプ 06P, 12P, 19P  
—ニ. 挖り込みが浅く、燃焼坑が長方形を呈するタイプ10P

この内、ニの平面形はハと同一であるが、燃焼坑が逆の位置になるものである。

- ②円形～楕円形——  
—イ. 円形で、掘り込みが深く底面が平らになるタイプ09P(2基), 15P, 16P, 18P  
—ロ. 楕円形で、掘り込みが深く底面がすり鉢状になるタイプ21P, 26P  
—ハ. 楕円形で、掘り込みが深く底面が平らになるタイプ04P, 07P, 13P, 20P  
—ニ. 楕円形で、掘り込みが浅く底面が平らになるタイプ25P  
—ホ. 長方形で、掘り込みが浅く底面が平らになるタイプ08P

- ③隅丸長方形——  
—イ. 隅丸長方形で、掘り込みが深く底面が平らになるタイプ01P, 05P, 11P

①については、火葬墓と火葬施設の両者の性格が考えられる。その中で、23P, 27Pでは埋め戻ししない炭内から銭貨が出土しており、火葬墓と考へて差し支えないと考える。また、それ以外についても副葬遺物は出土していないが、以下の論点から火葬施設ではなく火葬墓と考えられる。

1. 遺構内に炭が充填された状態で検出されている。覆土は人為的埋め戻しであり、遺構が繰り返し使用された状況がうかがえない。

2. 遺骨を取り上げるのであれば、天井部や壁が邪魔であるが遺構が壊されている状況は見られない。

3. もし、取り上げたとすれば遺骨の埋葬場所はどこか。②、③がその場所であるとすれば、その覆土中に炭や焼土、骨片等が遺存してもいいと思われるが、そういった顕著な事例は見られなかった。

②と③については、覆土の埋め戻しから、明らかに土坑墓と想定される。更に平面形態のバラエティはあるが、規模が1m×0.8m以上であることや覆土に炭等の混在がほとんど見られないことから、土葬の可能性が高いのではないだろうかと考える。

以上遺構については土坑墓、火葬墓の別はあるが、溝で画されたエリア内にほぼ同時期に営まれた墓域の一部が明らかにされたことが成果である。

遺物 今回の調査において、中世関連の遺物としては渡来銭貨36枚、磁器片2点、板碑片1点が出土した。以下銭貨、磁器について若干触れたいと思う。

- 銭貨は9遺構36枚が出土した。分類すると——  
—永楽通寶 6枚で構成される遺構07P, 08P, 09P  
—他種の北宋・唐銭 6枚で構成される遺構16P  
—北宋銭 1枚と磁器 1点で構成される遺構15P  
—北宋銭 1枚と明銭 1枚で構成される遺構18P  
—北宋銭 2枚で構成される遺構27P

—北宋銭2枚と明銭1枚で構成される遺構21P

—北宋銭(?)4枚で構成される遺構20P

以上分類したが、必ずしも6枚という枚数にこだわった六道銭ではないことが、この遺跡の出土例から理解される。

磁器は白磁1点、青磁1点が出土している。両者とも破片で全形を確認しえる遺物ではない。ただ、明らかに副葬品としての性格をもって、埋納されていることが理解される。なぜかというと、04P出土の白磁多角盃片は、埋め戻しのローム土中からの出土であり、混入遺物ではない。15P出土の青磁碗片は、北宋銭を伴う状態で副葬されている。以上の点から「破片」として副葬されたことが理解されよう。

注(1) (財)千葉県文化財センター鴨田清司氏に遺物を実見していただいた。青磁碗については、15世紀前半、多角盃については、15世紀後半の年代観を得た。おおむね15世紀後半の墓域としての性格が妥当であるということであった。筆者もこの判断に従いたい。

#### 参考文献

- 1992 (財)印旛郡市文化財センター「千葉県成田市駒井野荒追遺跡」  
1994 (財)千葉県文化財センター「房総考古学ライブラリー8」歴史時代(2)  
1996年版 永井 久美男編 「日本出土銭鑄銅鏡」 兵庫県立銭鑄銅鏡調査会  
1999 鈴木 公雄 「出土銭貨の研究」 東京大学出版会  
2001 亀井 明徳他 「基準資料としての貨幣陶磁器」 季刊考古学第75号

### 報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよしさくやまいせきはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	千葉県八千代市作山遺跡発掘調査報告書						
編著者名	森竜哉						
編集機関	八千代市教育委員会						
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 TEL.047(483)1151						
発行年月日	西暦 2003年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
さくやま 作山遺跡	やちよしこいあさくやま 八千代市小池字作山 412-1他	12221	1	35度 46分 34秒	140度 5分 39秒	20020118 ~ 20020205	450 知的障害者授産 施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
作山遺跡	包蔵地 土壤層	古代 中世	古代方形周溝遺構 1基 中世土壙 25基 中世溝 1条	弥生土器中世白磁、青磁 中世錢貨(開元通寶、昭 聖元寶、洪武通寶等) 板磚片	土壤には火葬墓、土坑 墓の区別あり

# 写 真 図 版



プラン確認状況



遺構全景(西側)



遺構全景(中央・東側)

图版 2



01 P 完掘状况



03 P 完掘状况



04 P 完掘状况



05 P 完掘状况



06 P 炭出土状况



06 P 完掘状况



07 P 遺物出土状況



07 P 完掘状況



08 P 完掘状況



09 P 完掘状況



10 P 完掘状況



11 P 完掘状況

图版 4



12 P 炭出土状况



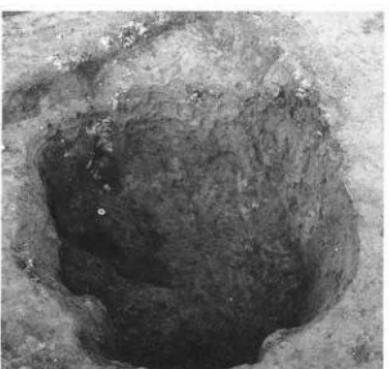
12 P 完掘状况



13 P 完掘状况



15 P 完掘状况



16 P 完掘状况



18 P 完掘状况



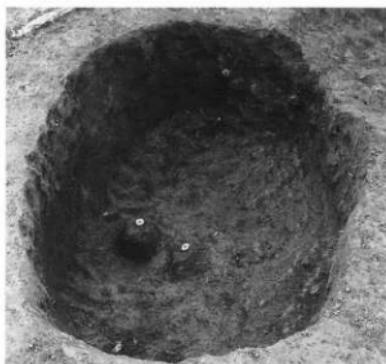
17P 炭・骨出土状況



17P 完掘状況



19P 完掘状況



20P 完掘状況



21P 完掘状況



22P 完掘状況

图版 6



23 P 炭出土状况



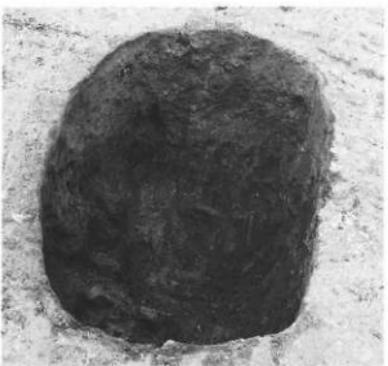
23 P 完掘状况



25 P 完掘状况



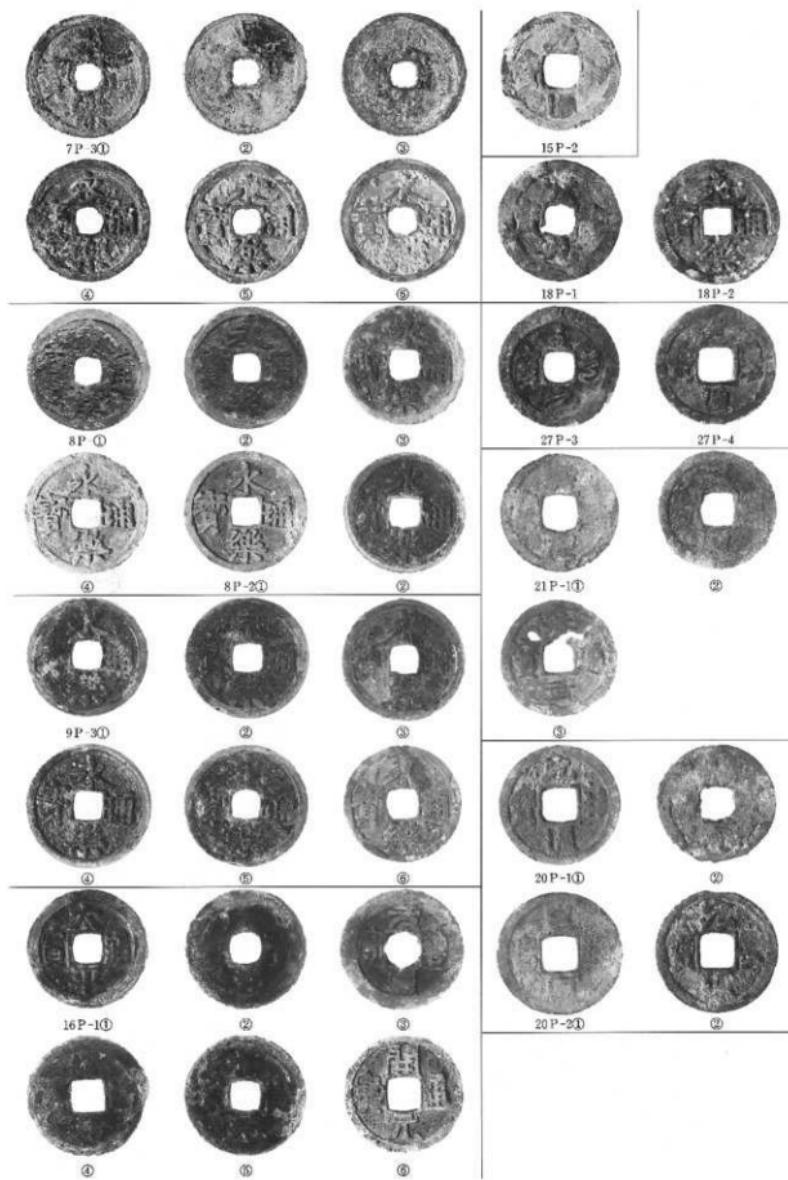
26 P 完掘状况



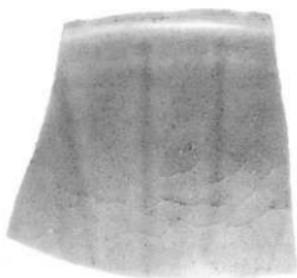
27 P 炭出土状况



27 P 完掘状况



図版 8



15P 1



遺構外 2



4P 1



遺構外 1

千葉県八千代市  
作山遺跡発掘調査報告書

2003

印刷日 2003年3月24日

発行日 2003年3月31日

発 行 八千代市教育委員会

〒276-0045 八千代市大和田138-2

TEL 047(483)1151